

野次馬スター

中乃森 豊

動物園から逃げ出したハシビロコウが近くの川に飛来したというニュースをテレビで観たとき、これは質のいい野次馬が現場に集まるかもしれないと胸が躍った。

火事や交通事故に集まる野次馬は怖いもの見たさや興味本位で現場を不用意に荒らしたり、騒ぎ立てて近所迷惑になったり、緊急自動車の通行の妨げになったりとマナーの悪い輩が多い。だが、今回のような珍しい動物を見物に来る野次馬はかなり期待できる。

俺は自らの心の中から駆け出てきた野次馬に飛び乗ると現場へと急いだ。

ハシビロコウは対岸の川の畔にいた。俺のいる岸边にはその姿をひと目見ようと野次馬に乗った大勢の人々が詰めかけている。

ロク々に小さな嘶きをたてる鹿毛の野次馬の群れから少し距離を置いて、一頭の野次馬に跨ったパンツスーツ姿の女が対岸を眺めていた。その馬の全身は深いブルーの毛で覆われ、脇腹には白銀色の斑が星座のように浮き立っている。そよ風になびくエメラルドグリーンぶちの鬣と尾が美しい。間違いない。野次馬の中でもとりわけ優れた能力を有する希少な馬——野次駿馬だ。

馬上からスマートフォンで対岸のハシビロコウの撮影を試みているその女へと俺は歩み寄ると名刺を差し出す。そこにはこう記されている。

野次馬調教師 馬淵隼人

女が訝しげに名刺を受け取ったところで俺はこう切り出した。

「あなたにはプロの騎手になる素質があります。私と一緒にご自身の野次馬を鍛えてレースに出て優勝しませんか？」

女はキョトンとする。当たり前だ。大抵の人間には自らの乗っている野次馬の姿が見えていない。

「あの、人違いではないですか？ 私はこれまで馬に乗ったことは一度もありません」

「今まさにあなたは馬に乗っているんですよ。野次馬という馬にね」

「はあ？」

俺は背負っていたリュックサックから新品のゴーグルを取り出した。

「野次馬レース専用のゴーグルです。騙されたと思ってこれをかけてみてもらえませんか」

女はしばしの躊躇いの後でゴーグルを受け取って装着した。

「えっ、何これ……」

女は自らの乗っている野次馬が見えるようになって驚く。やがてその青い毛並みをおずおずと撫で、緑の鬣をそっと手で梳いた。その間、野次馬は彼女にされるがまま、よく澄んだ黒く艶やかな瞳で彼方を眺めていた。

「これが……私の野次馬？」

俺は頷く。

「野次馬とは事件や事故が発生した際に現場へと駆けつけようとする人間の野次馬根性から生まれます。私は野次馬とその騎手を育成することを仕事にしているのです」

「はあ……それにしてもどうして私なんですか？ 今ここには私以外にも野次馬はいっぱいいるでしょうっ？」

「どんな野次馬でもいいわけではなく、レースで勝つためには野次馬根性を胸に燃やしてまっしぐらに現場へと疾走できる馬でなくてはなりません」

「それが、私の野次馬だと？」

俺は深く頷いた。「この目に狂いがなければ」

女は黒目がちの瞳で俺の目をじっと見た後で口元をふと綻ばせた。

「私、蒼井塔子といます。市立図書館で司書をしています」

「司書ですか……どうりで野次馬根性、いえ、好奇心が旺盛なわけだ」

塔子さんは黒髪のポニーテールを揺らすと白い頬を微かに赤らめる。

「お恥ずかしい限りです」

「いえ、野次馬の騎手としては必須の特性です」

俺達は馬上で握手を交わして「これからよろしく」と笑い合った。ここに調教師と騎手という師弟の関係が生まれた。

野次馬レースはおよそ月二回のペースで開催されている。レースには調教師の育てた野次馬とその騎手が出走する。ルールはシンプルで、ゴールとして設定された事件や事故の現場に最も早くたどり着いた馬が優勝となる。設定される事件や事故はどれも架空のもので、その内容や発生場所、日時が事前に知らされることはない。走る前から偽の事件や事故だとわかっていたら野次馬根性は湧いてこず、本気の競走とはなり得ないからだ。そのため実際の事件や事故の現場だと思っ  
て駆けつけたらレースのゴールだったということも珍しくない。野次馬レースに参加する者は常に気を抜くことなく人馬一体となって野次馬根性を奮い立たせ、全速力で現場へ向かうことを求められる。

塔子さんと彼女の野次馬の訓練は順調に進んだ。訓練とはいっても、競走に必要な基礎的な馬術を教えるにすぎない。なぜなら野次馬の能力は生みの親である騎手の野次馬根性に根差しているからだ。幼い頃から読書が何より好きで、図書館司書となった現在も興味と好奇心の赴くままにあらゆるジャンルの書籍を読み漁っている彼女の飽くなき探求心は衰えを知らなかった。さらに本で得たその知識を自らの目で見てみたいという野次馬根性も旺盛だった。彼女の心に棲む野次馬がずば抜けて優れた脚力を持つのも至極当然と言えた。

俺は塔子さんの野次馬をその輝くばかりの好奇心と体にある星のような模様から「ゴキスター」と名付けた。

そんなある日、塔子さんのトレーニングも兼ねて市内で発生した交通事故の現場へと野次馬を

走らせることにした。

現場に着くと、そこには既に赤い鬣に黒鹿毛の馬に跨る乗馬服姿の男がいた。その手には花束と賞金の目録が握られている。どうやら今回の事故は架空のもの、つまりレースだったらしい。優勝者である男は馬上から俺達に尊大な態度で笑いかけた。

「随分と遅いご到着ですなあ、馬淵さん」

男の名は間宮と言い、悪名高い野次馬レースの賞金稼ぎだった。悲惨な事件や事故の現場へと駆けつけては他人の不幸を目の当たりにして悦に入っている奴だ。

「おや、そちらは新しいお弟子さんですか？」

間宮は馬上の塔子さんを上から下までねっとり眺め、鼻で笑った。

「お嬢さん、悪いことは言わない。プロの騎手になるのはおやめなさい」

「どうですか？」

塔子さんが間宮に鋭い視線を向けた。

「あなたの野次馬は綺麗すぎる。我がヤジリダークのように邪悪さがなくてはレースには勝てない」  
間宮は「ヤジリダーク」と呼んだ自身の野次馬の首を愛しげに撫でながらニヤリと笑った。

俺は思わずカッと声を荒げた。

「そんなこと、勝負してみなくちゃわからないだろう」

「次のレースを楽しみにしていますよ。では」

間宮は馬の腹をひと蹴りすると黒い疾風のごとくその場から走り去った。

「次は必ず勝ちます」

塔子さんの凜とした声に合わせて、コーキスターが高く鳴いた。

決戦の日は突如として訪れた。

隣の住宅街で深夜に起きた火事の現場へと俺と塔子さんが野次馬で駆けつけている途中、背後から間宮が現れたのだ。

「おや、今晚は、お二人さん」

その穏やかな口調とは裏腹に、間宮の手は騎乗する愛馬の尻に執拗に鞭を入れていた。

「速い！」

間宮の操る黒鹿毛の野次馬は鬣と尾を炎のようになびかせると、ぐんぐんと俺を引き離していく。だが、塔子さんは負けていなかった。彼女の操るコーキスターはヤジリダークとほぼ互角の走りを見せた。程なく間宮と塔子さんは街路を縫うように疾走し、抜きつ抜かれつのデッドヒートを繰り広げ始めた。前方には黒い煙を上げる一軒の家が見える。ゴールである火事の現場だった。

最後の直線で決着はついた。フィニッシュで首を前へ伸ばした鼻の差でコーキスターが勝ちを制した。

「バカな……この私が負けるなんて……」

すっかり自信を失って仔馬のように小さくなった野次馬を引いて呆然と去って行く間宮の横顔を、傍らの家から噴き上がる炎が赤々と照らし出した。

遠くから消防車のサイレンが響き、野次馬が集まり始めた。

レースのゴールとして設定された架空の事件などではなく、本当の火事だった。

「誰か！ 助けてください！」

家の前に立つ女が周囲の野次馬に向かって懸命に訴えた。

「娘が、まだ家の中に！」

それを聞くや否や、塔子さんがコーキスターと共に燃える家の中へと飛び込んだ。

「塔子さん！」

俺は膝が震えて、その場から一步も動けなかった。

周囲の野次馬から悲鳴と嘶きが上がる。やがてその悲痛な叫びが歓声に変わった。

少女を抱いた塔子さんがコーキスターに乗って家の中から駆け出てきたのだ。

その直後、到着した消防団によって火の手は速やかに消し止められた。

塔子さんはレースへの半年間の出場停止となった。野次馬レースの騎手はいかなる時も野次馬に徹しなくてはならない。現場で発生する事件や事故そのものに自らが関わってしまったら、それはもはや野次馬ではなく当事者となってしまいうからだ。

彼女によって助け出され、その野次馬の駿足で病院へと送り届けられた少女はというと、手足に軽い火傷を負ってはいたものの命に別状はなかった。少女の母親は泣きながら塔子さんに何度も礼を述べた。

病院の外で塔子さんが俺に深々と頭を下げた。

「勝手なことをして申し訳ありません」

俺は首を左右に振る。

「あなたは人として正しいことをしたんです。俺は足が痺んでしまって何もできなかった。それにしても素晴らしい走りでした……一陣の風のような」

彼女は俺を見つめると静かに口を開いた。

「私はやはり野次馬レースの騎手にはなれません。せっかくご指導頂いたのに申し訳ないのですが、レースに勝つためにどんな時も野次馬に徹するというのは私にはとても無理だとわかりましたから……今までありがとうございます」

「こちらこそ、勝手に付き合わせてしまって……ありがとうございます」

俺達は笑顔で握手を交わして別れた。

数年後、塔子さんから手紙が届いた。

彼女のコーキスターはどうとう宇宙の彼方で起きた未曾有の規模の超新星爆発をひと目見ようと翼の生えた天馬となって星空へと飛び立ったという。人間の好奇心と野次馬根性には際限がないとつくづく思う。

以来、俺は雲ひとつなく晴れた夜には空を見上げて独り微笑む。

その名実ともにスターとなった青き駿馬は夜ごとベガス座とデッドヒートを繰り広げ、今では

数光年という鼻の差でリードしている。